

# 大学体育におけるFD活動の進め方 グループ討議報告

## グループ1

進行・報告者：柳田泰義（神戸大学）  
参加者：田井健太郎（東京医科歯科大学）  
岡田光弘（国際基督教大学）  
小林秀紹（札幌国際大学）  
正野知基（九州保健福祉大学）  
宮田浩文（山口大学）  
師岡文男（上智大学）  
宮崎正巳（早稲田大学）  
池田恵子（山口大学）  
谷藤千香（千葉大学）  
鈴木久雄（岡山大学）

### 1 自己紹介

各自、所属と氏名、そして専門領域などについて自己紹介をした。

### 2 本ワークショップで話し合う進行予定内容について説明し、協力をお願いした

最初に基調講演の小川勤（山口大）先生の「山口大学におけるFD活動の進め方」に関して意見交換を行った。山口大学方式の評価方法が今後主流になる可能性があることを聞き「大変だなー」といった感想が聞かれた。宮田先生（山口大）から体育の現状から、体育の現状もふまえて補足的なご説明を頂き、質問をした。この中で講義科目には適合する方法であるが、体育実技には1～5など

は良くできているが、そうではない部分もあり、理念を守りながら実技科目独自の方法を検討する必要があるだろう。また対象学生によって変わるであろうし、必修か選択かでも使えるのかなど十分検討する必要が感じられた、などの意見が交わされた。

### 3 事前にレポートを作成したシラバス作りについて、各自の着座席右側の方と説明および意見交換した

約10分の話し合いの後に、特に取り上げる内容を募った。お一人からは後期に新しい実技種目を開講するシラバスを提示され、皆さんからのご意見を求められた。また、夏場の炎天下での実技における熱中症の問題について発言があり、熱中症対策に何か工夫がないか意見を求められた。数名の方々からは、例えば大型のクーラーボックスを自前で準備してスポーツ飲料を適時学生に飲ませている、あるいはグラウンドに日陰を作り、適度な休憩を取らせている、危険性の高い場合には講義に振り替えるなど検討すべき、などの発言があった。本年7月の大阪で発生した某私立高校で体育実技中の熱中症と思われる死亡事故のケースが紹介された。

### 4 成績評価法について

FD推進部から提示された観点別一覧表に各自

で記入し、今度は着座席左側の方と意見交換した。その後全体で討論することとなったが、各大学とも実技科目での出席状況はどうしても評価の大半を占める評価項目であることが認識された。

## 5 FD 推進宣言と、大学院プレFDについて資料を各自で黙読した

その後皆さんからのご意見を伺う予定であったが時間が迫ったために記入用紙を配布して、後ほど回収することにした。用紙にて提出頂いた方、また、帰宅後に電子メールでご意見をお寄せ頂いた。厚くお礼申し上げます。

以下に意見などについてまとめる。

### 【FD 推進宣言に関して】

- ・趣旨は賛成であるが年間20回の研修会は実現できるのだろうか。
- ・マニュアルや解説書などの作成が必要と考える。
- ・夏期、冬期の実技研修会は大変に有効であり、必ず教授能力に反映するものである。ただ、今より多くの方々への参加を可能にするために時期、期間、場所などを更に検討すべきではないか。
- ・調査研究に関し、大学生の体力や体育教育の実態調査については、各大学のこのことに対する取り組みを把握し、必要に応じてデータの収集を行い、子どもの体力低下の数年後の姿として、大学体育の意義を社会に提示したい。また可能であれば、大学FDの一環にもあるように、既卒業者の状況について就職状況のみならず、社会体育活動の実態が追跡調査のかたちでおさえることができれば、社会人を輩出する機関としてのエビデンスを確保することになり、意義があると思う。
- ・「宣言」というと、とかく言い放しになりがちであるが、連合として支援・調査などの実績をできるだけ情報として内外に流すことによってFDの拡大に繋がるのではないかなと思う。



そうした情報を参考にしながら大学・個人でのFD活動を実施したいと考える。

### 【大学院プレFDに関して】

- ・「指導者養成研修会」をプレFDとして採用すべきである。
- ・教員採用に当たっては、他分野の審査員が主導となるケースも多くあると思う。その際にも体育分野の教育独自性を認めてもらうように働きかけないと、評価方法、教育重視などの実現は難しいと考えている。
- ・大学院教育は体育科学と現場との橋渡しとして学士教育以上に重要な位置にあると考える。現場に立つ体育教師が高度な学問的素養を身につけ、現場に還元していただければ、その教養を請う者たちの体育に対する認識はより良いものになることは以前から提言されてきた。そのような素養を身につける窓口として、指導スキルの向上のために研修と交流の場を提供してくれる大学体育連合の存在意義は大きい。
- ・大学院におけるプレFD活動は重要だ。大体連の研修会も大学院生の受け入れを積極的に行おうという意見もあるものの、院生自身が日頃の活動に追われなかなか実施できないのが実情ではないかなと思う。研修会において今回の研修員のような役職を作り、大学院生が研修活動に参加しやすいような仕組みを作る必要があると考える。

## ワークショップ 大学体育におけるFD活動の進め方

### グループ2

進行・報告者：小林勝法（文教大学）  
参加者：中山正剛（別府大学短期大学部）  
綿貫慶徳（上智大学）  
佐藤 健（実践女子大学）  
西脇 満（神戸学院大学）  
白川哉子（昭和女子大学）  
牧原 統（酪農学園大学）  
塩田正俊（山口大学）  
佐々木敏（北星学園大学）  
杉山 進（お茶の水女子大学）

#### 1 自己紹介

事前レポートにもとづいて、所属と氏名、専門領域などを順番に述べて自己紹介した。

#### 2 山口大方式によるシラバス作り：到達目標

まず基調講演(小川勤・山口大学教授)の要点を確認し、理解を深めた。そしてすでに事前レポートで山口大方式に従って、個々の授業のシラバス案を作成しているので、それを隣同士で見せ合いながら、互いに意見を述べあった。その後、グループ全体で意見交換をした。

シラバス執筆にあたっては「学生を主体にして書くこと」や「観点別に到達目標を書くこと」、そして「それを具体的に行為動詞で書くこと」については概ねよく理解し、事前レポートでもそれにしたがって書かれていた。しかし、厳密に検討しはじめると理解を深めなければいけない問題がいくつか指摘された。例えば、到達目標の「態度」の観点について、挨拶や安全管理などの受講態度だけにとどまらず、健康や運動への志向性や実践する能力を示すのではないかと意見があった。参加者は概ねこれに賛同したが「そうすると態度は他の観点と並列にはできないのではないかと」の指摘があった。確かに、基調講演の別配付資料によると、「知識・理解」と「興味・関心」、「技



能・技術」は到達目標に分類され、「態度」と「思考・判断」は向上目標に分類されている。このような階層構造をもっていることを理解してシラバスを執筆する必要があることが分かった。

#### 3 山口大方式によるシラバス作り：成績評価方法

シラバスの執筆項目の到達目標に続いて、成績評価方法について実習した。まず、配付資料の観点×評価方法のマトリックスの該当箇所をチェックし、合計が100%になるように評価方法別の割合を記入した。個々にこの作業をした後、先とは別のパートナーとペアを組み、互いに意見を述べあった。その後、グループ全体で意見交換をしたが、成績評価に関する情報の提供や以下のように体育実技に特有の問題が指摘された。

- ・JABEE（日本技術者教育認定機構）では一発試験は認められておらず、1つの試験方法で評価できる割合が定められている。確か30%くらいだったと思う。
- ・管理栄養士養成課程では出席を点数化してはいけないことになっている。
- ・体力テストは成績に含めるのか。その場合、どれに該当するのか。
- ・到達目標を「できる」とした場合、実際に学生ができなかったらそれは評価が悪くなるのか。また、できるようにさせなかった教員の問題でもあるのではないかと。

## おわりに

グループ討議の時間が短くて、残念ながら全般的に十分な議論ができなかった。当初予定していた「FD 推進宣言について」と「教養体育の立場

からプレFD（大学院教育）に期待すること」には一切踏み込めなかった。しかしこれを機会に、シラバスや成績評価方法について、これまで以上に詳細な検討がされることを期待する。

## グループ3

進行・報告者：山内 賢（慶應義塾大学）

参加者：鳥海 崇（慶應義塾大学）

田原亮二（福岡大学）

大家千枝子（高崎健康福祉大学）

水谷秀樹（富山大学）

角田和彦（北里学園大学）

杉浦崇夫（山口大学）

松尾静香（徳山大学）

### 1 自己紹介・講演内容について議論

#### 基調講演について

総じて、講演は大学の体育教育の重要性、エビデンスの必要性を改めて感じさせられる講演であった。「大学は学士力をつける場であるから、体育で学んだことを如何に卒業して生かすかを教えるべきである」ということ、「体育とは、生きる力を教養として身につけることができる」ものであると提言された講演であった。ならば、学生が授業を行う際に教員は、単なる安全管理者だけになってはいけない。そしてシラバスの存在の中に学生との教育契約をしっかりと結び、社会に出て役立つ生きる力へのシナリオを講義種目特性に合わせて伝えていくべきである。その意味でもシラバスとは、目的と評価が連鎖するものであり、加えて教員の情熱こそが体育の魅力を引き出す源であるに違いない。また文武両道とよく言ったものであり、「体・徳・知」の調和の取れた教育は、体育が成せる最高の業であろうとグループ内で結論づけた。

### 2 山口方式に従った事前レポート・成績評価について

山口大学が行っているカリキュラムマップを体験した。シラバスの到達目標と評価手段の比重を、  
、  
等で記入したマトリクスは、「最終的な評価点の配分に役立つ」といった皆さんの共通理解であった。しかしグループのディスカッションでは、山口大学が示す GP (Graduation Policy) の観点としての理想は解るが「縛られて、体育本来が持つ状況による教員采配の自由度が薄れ、実行への道は険しさがあるのでは…？」といったネガティブトークや感想が多く論じられた。その点についての反論としては、FD が存在するゆえに、教員の質を向上させることが最重要であり「授業は教員の趣味の内容であってはいけない」、「シラバスに負けない教員像を自らつくりあげる教員の意識や受容性も望まれる」との発言があった。

### 3 FD 推進宣言について

内容はすばらしいが、誰に訴えていくの!? その受け皿を上手く選択しなければ机上の空論とな



## ワークショップ 大学体育におけるFD活動の進め方

ってしまう、との発言があった。

### 4 大学院でのプレFDに期待すること

大学院生が教員としてデビューするには、研究業績に加えて、それなりの教育実績も必要であろう。プレFDは大学院時代に図られることによって、即戦力や個人の教育に関する自信・自覚に貢献することに間違いはない。しかし、その環境が整っているかどうかは定かでない。あるとするならば、大学院生が在籍する大学で、縦断的にTA制度をおくことは最も身近なことであろう。また発想としては、企業がよく行うインターシップ的な

もの（大学版教育実習）を各大学が横断的に繋げて企画することが考えられる。しかしこれらを誰が、何時、何処で参画・企画するかはこれからの案件となると思われる。これに本連合がその役を名乗り出ることはいかかなものか。

### 5 おわりに

このたびは時間も短く、足早に行われたワークショップであった。もう少し議論が出来るチャンスを今後いただけると期待して、この会は閉会した。

## グループ4

進行・報告者：後藤光将（明治大学）

参加者：荒牧亜衣（目白大学）

松浪登久馬（近畿大学）

渡辺英次（専修大学）

富岡 徹（名城大学）

五十嵐純（関西医療大学）

蔵満保幸（札幌国際大学）

村上秀明（桐蔭横浜大学）

池上久子（南山大学）

青山良成（松本歯科大学）

### 1 自己紹介・講演内容について議論

まず、各自の自己紹介を行った。その後、本日の講演内容の理解を深めるために意見交換を行った。ここでの論点は、授業評価についてであった。

正確な授業評価を実施するには、体育実技の特殊性に合わせて授業評価項目を作成する必要がある。各大学、各学部における教養教育自体にも独自性があるため、大学、学部毎の特徴にあった授業評価項目も考慮する必要がある。山口大学のように学長が体育に対して理解があるのは強みであり、大学執行部、とりわけ全学教務に体育教員が

コミットメントできることが重要だという意見が出された。

### 2 成績評価方法（観点別）の記入および議論

各自作成したシラバスの授業到達目標に合わせ、成績評価方法（観点別）を記入した。隣同士で2人1組になり議論したのち、全体で討論した。体育実技授業において、出席をどの程度重視しているのかという問いかけから始まった。出席点と平常点は相関関係にあることが確認されたのち、見学、遅刻、早退などの取り扱いについて、各参加者の所属大学のケースを紹介しあった。



多くの大学では、3分の1未満の欠席を欠格条件としていたが、中には5分の1未満の欠席を欠格条件とする大学もあった。出席、遅刻などを全て点数化して学生に対して明確に示す大学もあった。全出席が基本であるため、出席の評価基準(欠格条件)を明確に示さないという大学もあり、出席の取り扱いにおいてもかなり多様であることが確認できた。

### 3 大学体育連合に期待すること

最後に大学体育連合に期待することを話し合い、以下の意見が出された。

経験の浅い教員のために、授業評価法の基準を作成して欲しい。しかし、大学、学部によって状況が違うので一層の議論が必要と思われる。

指導要領のように型にはめるのはよくないが、多くの授業シラバスを提示することは有益であると思われる。

シラバス作成についても、山口大学方式のように、大体連方式の記入方法を策定してもよいのではないか。大学体育関連情報(シラバスなど)に関するデータベースを作成してオンライン上に公開し、自由に閲覧、自由に追加できるようなコミュニティサイトを作って欲しい。

### 4 おわりに

今回のワークショップは、10名で1時間強という短い時間で行われたため、発言者に偏りが出ることもつながった。少なくとも2時間程度の時間を確保すれば、より多様な意見が期待できたと思う。

しかし、直前の講演や事前課題の効果もあり、ディスカッション自体は円滑に進行した。そのため、比較的短い時間であったにも拘わらず、一定の結論が得られ、参加者全員にとって有意義な機会となったことは間違いない。

## グループ5

進行・報告者：佐藤節子(埼玉女子短期大学)  
参加者：野口麻美(青山学院女子短期大学)  
畑山知子(南山大学)  
高丸 功(学習院大学)  
曾根涼子(山口大学)  
中村友浩(大阪工業大学)  
田中幸夫(東京農工大学)  
掛水 隆(東京電機大学理工学部)  
村本和世(日本体育大学女子短期大学部)  
大山 肇(京都外国語大学)

### 1 自己紹介

所属と氏名を順に述べた。メンバーは、副手や新任からベテランまで多彩な顔触れとなった。



### 2 山口方式について

到達目標や成績評価について以下のような意見が出た。山口方式は観点別到達目標ごとの成績評価を出すことで細分化され、成績をつける際の教員の負担が増える。しかし、細分化されている方が評価しやすい。

## ワークショップ 大学体育におけるFD活動の進め方

シラバス通り実施するということについてだが、受講学生の能力や自主性に合わせて内容を変更することもあるので、シラバス通りにいかないこともある。また、シラバス通り実施すると指導がつまらなくなることもある。しかしながら、学生による授業評価には「授業内容がシラバス通りだったか」という項目があり、さらに、学生による授業評価が将来的には給与に反映される可能性も考えると、シラバス通り実施せざるを得ない現状もある。教員の評価は教育能力と研究能力を総合的に行うべきだ。

### 3 事前レポートについて

隣同士ペアになって話し合い、話し合った内容を報告した。どの参加者も、シラバスと学生の授業評価の他に、所属組織の特徴的な取り組みを行っている。また自身の資質向上については、アドバイスを受たり、研修会へ出席したりするなど、各自積極的に取り組んでいるとの報告があった。

そのほかに以下のような報告や意見が出た。

山口方式は、客観化できるという長所があるが、柔軟性がなくなるという短所がある。

シラバスについてだが、教員には表と裏のシラバスがある。また、シラバスを読んでない学生も多くいる。シラバスは細かくやりすぎると良くない。講義のように行かないので、実技シラバスがあると良いのではないか。

教員の評価についてだが、ある大学では学生の投票によって選ぶベストティーチャー賞制度があったが、1、2年で立ち消えになった。どんなに良い授業でも厳しい授業を行うと学生の授業評価は下がる。学生の授業評価には教員の人間性が反映される。学生の授業評価を給料へ反映させるのはよくない。ある大学には研究業績が3年間無い教員は研究費をカットされる、という制度がある。

新任の教員が遭遇する問題、具体的な事例への対処法、あるいは学生への対応の仕方などについてのサポートシステムをより充実させてほしい。

以上、活発な意見交換が行われた。残念ながら時間不足のため、当初予定していた「基調講演の理解」、「FD推進宣言について」、「大学院でのプレFDに期待すること」についての意見交換はできなかったが、FDへの取り組みについて情報交換でき、とてもよい刺激になった。

## グループ6

進行・報告者：森田 啓（千葉工業大学）

参加者：岩田智秀（日本体育大学）

岩館雅子（日本大学）

上田真寿美（山口大学）

大浦隆陽（福岡国際大学）

鶴原清志（三重大学）

中雄 勇（阪南大学）

沼澤秀雄（立教大学）

村本名史（山口福祉大学）

森 正明（中央大学）

### 1 基調講演について

佐藤豊氏が小中高校との接続（延長）としての体育が必要ではないか、との私見を述べられたことに対して、大学設置基準の大綱化の際には逆のこと（小中高校の延長としての体育は不必要）が体育に要求されてきたが、近年の大学生の質的变化を受けて、体育に求められることが変わりつつあるのかもしれない。しかし学習指導要項に縛られない自由度を生かし、各種目や演習型の体育の提示などが、大学体育関係者に求められるのではないかとの意見が出された。また学習成果の保証に対しても、その必要性は認めるが、実際に成果



を実証することは困難との指摘が出された。丸本卓哉山口大学長は「身体と心」の問題について言及されたが、大学ではスポーツの文化的側面も学習する必要があるので、この点についても検討することが大事であるとの意見が出された。

## 2 山口大学方式全般について

学外に説明責任を果たすことからいえば、非常に先進的取り組みとして評価されるとの意見が出た一方で、問題点の指摘もあった。

まず膨大なエフォートが必要となる点。大学教員本来の任務は教育・研究活動であるが、FD活動に膨大なエフォートが割かれるとなると、本来の教育・研究活動に支障が生じることも危惧される。さらに体育に関して言えば、専任が一人の大学もあり、FD以外にも多くの事務作業を体育教員が担っているケースもある。

さらに学習成果を実証することが困難である点。丸本学長が指摘された体育による心の問題も実証は困難であるし、コミュニケーション能力にしても健康にしても同様である。これらを評価項目に掲げることは、体育の独自性を主張し、体育以外に受け入れられやすいようにも見えるが、実は自分たちの首を絞める危険性もあるのではないかとの指摘があった。

FD活動は具体的な成果を提示することも要求

される（英語教育でTOEICが多くの大学で導入されているのは、成果が数値として見えるから）、体育でいえば、体力テストあるいは心理テストで示せる成果が該当するかもしれないが、さまざまな縛りを外し、学生が主体的に自由に取り組む体育を実践すれば、もっと体育は楽しいものであり、数値で示せるもの以上に多くの学習成果が（結果として）期待できるとの意見も出された。

山口大の事例を参考にして、各大学に即したFDを体育関係者が提示していくことが重要との意見も出された。

## 3 全体討論

カウンセラーを導入して退学者が減少すれば、大学の収入が安定するという経営の論理になる。このような費用対効果で考えると、体育施設の建設費や維持費に匹敵する成果を出さなければならないことになる。体育による友人作り機能によっても同様の効果が期待できるが、それもやはり経営の論理である。経営の論理と大学教育の本来の目的とは異なる。FD活動は重要だが、教育・研究活動をよくするための一つの手段である。体育教員がFDに非協力的と評価されることはよくないが、決してFDに埋没することなく、大学体育教員は教育・研究活動の充実に努めることが重要である。

また大学体育の歴史、学習目標や学生による授業評価など、参加者が世代を超えて討議できる機会となる大体連の研修会はFDの視点からも貢献している、との意見も出された。



## ワークショップ 大学体育におけるFD活動の進め方

### グループ7

進行・報告者：平田智秋(十文字学園女子大学)  
参加者：高塚美香(青山学院女子短期大学)  
高橋京子(早稲田大学)  
嵯峨 寿(筑波大学)  
柿山哲治(活水女子大学)  
出雲輝彦(東京成徳大学)  
丹 信介(山口大学)  
高橋保則(大阪電気通信大学)  
山田 茂(東京大学)

7班には幅広い年齢層と多彩な専門をお持ちの先生方が集まった。活発な議論が展開されたが、モデレータの時間管理が甘く、予定された内容を消化し切れなかったことを、予めお詫びしておきたい。

主要テーマであるシラバス作りについて最初に書いておく。山口大学方式の理解と活用について意見交換をした。丹先生に教わりつつ、各自のシラバス案を吟味したが、この方式でシラバスを書くには訓練が必要だと感じた。

たとえば到達目標には5つの観点があるが、これは体育科目だけでなく、一般講義や実験科目でも共通の観点だそうである。したがって体育科目に援用しにくい部分もある。筆者はジャグリング

を題材にシラバス案を書いたが、「ジャグリングの基本技を『説明できる』』という到達目標は知識・理解の観点に分けられるが、「ジャグリングの基本技を『見分けられる』』になると、思考・判断の観点に分類されるそうである。このように観点ごとの言葉遣いに細心の注意が必要となると、シラバス作成にはかなりの労力を要することは容易に想像できる。この労力が学生に望ましい形で伝わりうるのか、実技内容そのものの改善に寄与しうるのか、考える契機となった。個人的には、観点の分類には体育独自の解釈基準を設けても良いような気がした。

到達目標の観点が細分化されると、それぞれの観点からの「スポーツの楽しみ」を提案できる。その反面、到達目標の呈示そのものが、スポーツの多彩な楽しみを制限しうるのが心配になった。スポーツの楽しみはシラバス執筆時に教員が想定する範囲に限らず、学生が自ら独自の楽しみを見出すことにも価値があるように思う。そうするとシラバスに呈示される観点が明確であるほど、スポーツがもつ楽しみ幅に制限がかかるような印象を持った。もちろん教員は、担当実技の専門家であるので、各種目の持つ楽しさを熟知している。その楽しみ範囲をどれだけ柔軟に設定しうるのか、教員の度量が問われている気がした。

基調講演については、山田先生から「果たして



本当に子どもの体力が低下しているのか」という疑問が提起され、これについても活発な議論があった。また早稲田大学の高橋先生からは「心に問題を抱えた学生に対する支援」について問いかけがあった。他者とのコミュニケーションが難しい学生の実技参加をどう促すのか、そして体育科目

が心の問題を抱えた学生に対して良好な影響を与えうるのか、という問題は、体育教員としてこれから真剣に取り組むべき課題であろう。

以上で時間切れとなった。ご参加された先生方からは、いろいろな話題を通じて多くの示唆を頂いた。ここに記して感謝したい。

## グループ 8

進行・報告者：石渡貴之（立教大学）  
参加者：功刀 梢（青山学院女子短期大学）  
成瀬和弥（東京福祉大学）  
上地広昭（山口大学）  
木内敦詞（大阪工業大学）  
楠原慶子（立教女学院短期大学）  
熊本和正（近畿大学）  
海野勇三（山口大学）  
森下春枝（青山学院女子短期大学）  
中山正吉（島根大学）

### 1 自己紹介

事前レポートを見ながら、氏名・所属、専門領域などを述べて順番に自己紹介を行った。

### 2 所属組織での FD 活動の紹介

これまで所属先で行われてきた FD 活動について、3名の先生に内容をご紹介頂いた。森下先生からは2007年度に特色 GP に採択された「健康教育授業を軸とした健康支援」について、木内先生からは「宿題を用いた健康関連体育授業プログラム」について、熊本先生からは月に1～2回開催されている実技指導法の研修会や模擬授業について説明して頂いた。紹介して頂いた後に質疑応答が活発に行われ、どのFD活動も特徴的で熱心に取り組まれていることに一同感銘を受けた。

### 3 シラバス作りについての意見交換

隣同士ペアになってシラバス作り（事前レポート）について話し合い、その後話し合った内容を報告し、最後に全体でディスカッションを行った。

多かった意見として、授業の到達目標の中で、思考・判断の観点及び表現の観点の設定が難しいことが挙げられた。また関心・意欲を如何に引き出せるかは重要な観点だが、評価に入れて良いのかという議論も行われた。

さらに実技テストの必要性についても議論が行われた。実技テストを行うことにより学生自身は目標ができ、モチベーションが高まるので良いが、その反面、時間がかかり取られてしまい、練習時間や実践時間が少なくなってしまうことや、テスト中に動かなくなる学生が増えてしまう問題点も挙げられた。また、実技テストは教員自身が技能に自信が無いとなかなか評価出来ないのではないかとこの意見も挙げられた。

その他、体育実技授業において、出席をどの程度重視しているのかという観点についても議論がなされ、見学、遅刻、早退などの取り扱いについて、各参加者の所属大学のケースを紹介もあった。その他、チーム点、技術点、実技点の割合についても議論された。

### 4 山口大方式について

山口大学の上地先生、海野先生が参加者としていらっしまったので、改めて山口大方式について説明して頂いた。色々な問題点も勿論あるが、大

## ワークショップ 大学体育におけるFD活動の進め方



切なのは「全員が先ず同じ方式に則って実行してみることだ」ということに一同納得した。何事も実行してみないと分からない。実行してみて色々議論し、修正していくのが重要であるとの結論に至った。

### 5 おわりに

グループ討議の時間が限られていたため、残念ながら全般的に十分な議論ができなかったが、一定の結論が得られ、参加者全員にとって有意義な

機会となったことは間違いのない事実である。当初予定していた「FD推進宣言について」、「大学院でのプレFDに期待すること」についての意見交換は全くできなかったのも、また別の機会にディスカッションを行えば思う。

終始活発な議論が行うことができ、FDへの取り組みについても情報交換でき、とても有意義な時間が過ごせたと思う。これを機会に、シラバスや成績評価方法について、これまで以上に詳細な検討がされることを期待する。